

志望理由書の書き方についての覚書（どう自分をアピールするか）

文責 国語科 常法 建

●「もし、私が転職するとするならば、どんな志望理由書を書くのだろうか」という想定で、以下をしたためてみました。まずは御笑覧ください。

学校とは、社会に出て行くための準備をする場所である。では、社会とはどのような場であるのか。私は、第一に自ら考えて行動することが求められる場であると考え。例えば、企業の採用担当者が最も重視するのは、コミュニケーション能力であると言われる。コミュニケーションとは、自分で考えたことを、相手に伝わるように留意しながら、言葉や行動にすることだ。また、これはある大学の経済学部教授から聞いた話だが、変化の激しい現代、大学を出て就職してから10年も経つと、かつて習った理論等は通用しなくなってしまうのだそうだ。その時に肝要なのは、自らアンテナを張って、時代についていくことであると、その方は教えてくださった。つまり、自ら考えて行動していく姿勢こそが、この激動の、先の見えない時代に必要なことであり、中等教育機関が意識してその伸張を担うべきことではないだろうか。このように考える。そして、この考えは、貴校の掲げる「自主自立の精神」に相通ずるものがあると思うに至った。

さて、国語教師として最も問われるのは教科指導力である。初任校の●●高校では、センター試験の指導はもとより、東京大学・京都大学といった旧帝大の指導に携わることができた。また、2校目となった■●高校は、学校全体として地元私立大学の指導に力を入れていたのだが、3年間担当した学年においては、西南学院大学の合格者は従来比の倍増、また、福岡大学でも、国語の平均点を大きく上昇することに成功した。学校外でも、県の国語部会が作成している「新入生テスト」専門委員を4年間務めたり、▼▼予備校の冠模試を作成したりと、多くの場で勉強させていただいた。

ところで、2011年の東日本大震災は私にとっても大きな出来事だった。困難な時代を牽引するだけの力を持った生徒を育てたい、その焦りから、私立校への転身を決意した。転職先の学校は「教科第一主義」を掲げており、研究に注力できる環境であった。2020年度の「入試改革」に備えるべく学校全体として動いており、数多くの研究の場に加えてもらい、時代の先端を知りうるような仕事にも数多く携わった。また、部活動では新聞部顧問を拝命し、新聞作りを通して生徒自らが主体的に学校運営に参画し、さらには世界への視座を養っていく、そういった活動を支えるという意義ある仕事にあたった。大きな賞も何度かいただいたが、賞云々よりも、教員と生徒が一体となってより良い学校を作ろうとする、そのうねりの中に私自身もいたのだろうと、振り返ってみて思う。

ただ、中途半端なことができない私に、いつしか過剰に仕事が集中し、周囲の人間も依存的になるという固定的で不健全な状態が生じた。このまま定年までここにいてよいのか、その悩みを次第に強くしていく中で、2020年、コロナ禍到来。休校が明けても、新しい生活様式が求められる中で、教師とは何なのかと思案する日々が続いた。ひねり出した答え、それは、そこに集う若い人たちと苦楽を共にしながら、「自分が社会とどう関わっていくか」について考える機会を保障するのが教師だ、というものだった。つまり、この文章の冒頭に述べたことに相通ずる。それはコロナ前と何ら変わらない。ただし、コロナ禍の学校は変化も求められる。例えば、オンラインを十分に活用し、生徒の学習にも活かす仕組みを学校全体として一早く構築できれば、それは大きなアドバン

ページとなる。「唯一生き残る者は変化できる者である」という格言があるが、変化を続ける環境で働くことが、人生後半に差し掛かった私自身のさらなる成長に、変化にもつながるのではないか。…そう考えて、貴校で働くことを志望した、というのが事の次第である。過日、実際に御校にうかがって、ひたむきに学習に励む生徒の様子や先生方の真摯な姿勢に感銘を受け、難関大学を目指すことを掲げる集団の一人として働きたいという思いを改めて強くした。これまで23年間の教師生活で培った国語に関する知見を、それを必要とする若い人たちに届けたい。また、訪問の際に御校職員の年齢構成も少し伺ったが、自分の年齢や経験を考えた時に、ベテランの先生方と若い先生方とのつなぎ役を務められるのではないかと考えている。

先日、かつて授業を担当していた生徒の一人から便りが届いた。九州大学に総合型選抜で合格したこと、私が在職中に実施した「志望理由書の書き方」の授業が役に立ったことが書かれていた。そして、次の一節に思わず涙した。「先生はきっと今日も、僕ら学生の為にできる限りのことをねばり強く尽くしてくださっている。だから僕も、最後まで絶対に諦めるわけにはいかない。そのことが、私にとってずっと心の希望でした」……すべては生徒のためという思いは、紅顔の少年だった頃と変わらない。是非、貴校で働かせてください。

●もし宜しければ、上の文章を読んだ感想を、周りの方々と述べ合ってみてください。

●この文章をしたための時に気をつけた点は、以下のようなことです。

A 受験先の学校の校訓や学校目標・教育方針などを調べました（「自主自立の精神」とか、難関大学をめざすとか、生徒のためにという姿勢とか）。

B その学校が求めるであろう力や資質（教科指導力だとか、部活動のことだとか）に合わせて、これまで自分が携わってきたことなどを書きました。

C その学校のHPを見たり、学校パンフレットを熟読したりするなどして、よく調べないと知り得ないような内容を織り交ぜました（オンライン授業にいち早く対応した学校であるとか、教員の年齢構成とか）。

D 入職してからどのように働きたいのか（学校のために何ができるのか）を書きました。

E 是非とも働きたいのだという熱意が伝わるように書きました。

●さて、これを皆さん自身のことに転化して考えてみましょう。皆さんが「志望理由書」を書く場合、一般的には、下記のような要素が必要だとされています。

A 大学・学部学科のアドミッション・ポリシー（以下AP）などを覚えていて、それを踏まえて話す／書くことができる。また、カリキュラムの特徴や、力を入れている研究・教育内容について（複数）挙げるができる。

B 自分が大学・学部学科のAPに合致する人物であることを、中学・高校時代の経験を通して話す／書くことができる。（例えば、部活動の部長→リーダーシップ、体育祭の実行委員→調整能力、とか）

C 大学・学部学科／将来就きたい職業について、高校（中学）在学中によく研究した（例えば、★★教授の模擬講義を受けたとか、オンラインオープンキャンパスに参加したとか）ということを話す／書くことができる。

D 大学でどのように学ぶつもりなのかという「学修計画」を詳しく話す／書くことができる（カリキュラム内の学びだけではなく、正課外の活動も具体的に考えていると分かる）。

E 大学・学部学科／将来就きたい職業に対する熱意をうまく話す／書くことができる。

●では、左記のことに、以下の枠を埋めていきましょう。

A 第1志望として考えている大学・学部学科のAPを書いてください。さらに、その大学・学部学科のカリキュラムの特徴や、力を入れている研究・教育内容について列挙してください。

B 自分が大学・学部学科のAPに合致する人物であることを、中学・高校時代の経験を紹介しながら示してください。

C 大学・学部学科／将来就きたい職業について、高校（中学）在学中にどれくらい研究したかを示してください。

D 大学入学後の「学修計画」について、詳しく示してください。

E 「熱意」をいかに伝えるか、話す／書く上での作戦を示してください。

【焦りを感じた人へ】

もし、万が一、このプリントをここまで読んで焦りを感じている人がいるならば、急いで材料をかき集めてください。材料をかき集める手段が分からない人は、自分だけで悩んだりせずに、教員や保護者に相談してください。

【秋休みの課題】

ここまでの内容を踏まえて、「志望理由書」を800字で書き、11月7日（月）に担任に提出してください（挟み込んでいる原稿用紙を使ってください）。

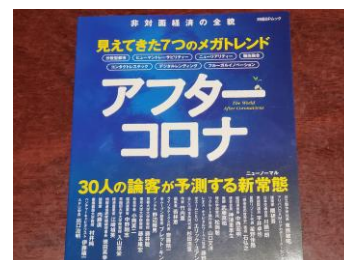
【おまけ、でも大切だと思うこと】

●その1

もう2年半も私たちが苦しめているコロナ禍。皆さんが社会に出るときに、影響がどれくらい残っているかは正直、私には分かりません。でもゼロではないでしょう。携わる分野によって程度の大きい／小さいはあるかとは思いますが、例えば、「コロナが発生して、自分の携わる分野の状況はこのように変わった」。だから、こんなアプローチを大切にしたい」といったことを語れる／書ける、というのは、2022年段階においては大切かもしれないな、と個人的には考えています。

（もちろん、全く影響を受けない分野もあるかもしれないし、あるいは逆にビジネスチャンスだと捉える人もいるのかもしれませんが）

また、世界を揺るがしているロシア／ウクライナ情勢を踏まえて書くことも考えられるでしょう。



●その2

東京大学の社会学者で副学長も務めた吉見俊哉氏は、これからの時代は「二本の刀」を持つべきだ、ということを著書の中で述べています。現代の複雑化・流動化する社会においては、自分の専門分野に閉じこもるだけでなく、関連する分野に対する知見も備えていた方が、諸問題に柔軟に対応できるというのです。一昨年度入試では、早稲田の政経が一般入試で数学を必須にしたことが大きな話題となりましたが、吉見氏の考えに相通ずる点があるかもしれません。あなたの「第一志望」の分野が、他の分野とどのような関連性を持つのかを考えておく（話せるようになっておく）方がよいのかもしれませんが。

●その3（完全なるおまけ）

生徒と話していて、志望校の入試における各教科の配点を知らない人がいると気付きました（共通テストが何点分として計算されるか（傾斜が掛けられるのか）とか、二次試験の科目は何と何で、といったことです。英語外部検定利用の可否も含みます）。受験戦術や、日頃の勉強の戦術を立てる上では必須です。例えばベネッセのサイト「マナビジョン」などを使えば簡単に調べることができます。また、学校によっては過年度の入試結果や合格ラインなどを開示しているので、調べてみてください。

なお、入試は「選抜」なので、（とてつらい現実ではあるのですが）全員が第一志望に合格するという奇跡はなかなか起こりません。従って、プランBまで考えて、その入試形態についても熟知しておく必要があります。プランAを調べる際に、あわせてプランBも調べておくようにしましょう。

日々、努力を重ねている皆さんが、入試を終えたときに「自分はやりきった」と思えることを切に願っています。長文をお読みいただき、ありがとうございました。